

総 評

審査委員長 谷 口 元 (名古屋大学名誉教授)

応募があった11点に対し、審査員5人による審査が始まったのであるが、小生は当初からどの作品に票を投じるべきか大いに悩んだ。第一次投票の結果は、今まではいくつかの作品に票が集中することが多かったのであるが、今回は最高得点の作品が何と7点という、驚愕すべき票の拡散状態から選考が開始された。通常は投票を重ねる毎に作品の良し悪しについて議論するが、出自の異なる委員同士の議論では、声を大にする人物の意見で票が

流れる傾向にあり、それを避けるために今回は同数の得票を得た作品の中から、各自の判断でどの作品に、あらためて票を投じるかという二者択一方式で絞り込んで行った。その審査結果について、会長賞、優秀賞計4作品の講評を委員長責任でとりまとめた。講評していない奨励賞の作品も含めて、評価の視点が異なれば全く異なる結果になっていたと思われる。このような状況での審査を経て、価値観の多様化を実感している次第である。

会 長 賞

御福餅本家 本店

三重県伊勢市

清水建設株式会社名古屋支店一級建築士事務所



撮影：エスエス名古屋 相羽光徳

設計意図

伊勢夫婦岩への参道沿いに江戸時代より続く老舗和菓子企業の地域活性化と事業継続を目指す新店舗を設計した。歴史的景観との調和を図りつつ、地元産木材を活用した内外装や什器家具、地域特産品の展示ギャラリーを設置。周辺地域の詳細な調査や、隣接する重要文化財「寶日館」との調和を意識しながら建物配置や意匠を設計した。地域景観

を守る意匠をまとった建物は、津波対策としてRC造を採用することで地域産業も護る。地元の工芸品の展示や三重県産木材の活用を通じ、地域の文化や自然環境の保全に寄与している。老舗企業として、次の100年に向けた事業継続と地域の賑わいの再生を目指す新店舗計画は、地域景観の継承と発展の象徴となっている。



撮影：エスエス名古屋 相羽光徳

審査委員長講評（名古屋大学名誉教授 谷口 元）

敷地のある伊勢二見の地は、かつては神宮参拝客の逗留地であり、旅館街として隆盛していたが、乱開発によって荒廃してしまった街の風景を回復するため景観規制がなされ、かえって再開発意欲が衰退した地域とのこと。表参道沿いの蔵造や下見板張りや並木など、伝統的な景観要素を周到に現地調査したうえで、敢えて重要文化財「寶日館」隣接地に計画地を定め、当施設を設計・建設・運営し、

表参道沿いの景観形成に貢献することを意図していることが評価される。蔵造や入母屋屋根など伝統的な意匠でまとめられている。津波による浸水が予想されるため、商品製造ラインは2階に設けて生業を守り抜き、1階は敢えて軽量な材料で仕上げて被災を覚悟し、参道沿いの賑わいの演出を最優先していくという姿勢を示している。

優秀賞

トヨタ車体いなべ工場福利厚生施設 ―イナテラス―

三重県いなべ市

トヨタT&S建設株式会社一級建築士事務所



設計意図

三重県いなべ市の工場内の福利厚生施設である。周囲を山に囲まれた自然豊かな工場の敷地内にある計画地は斜面の上部に位置し、南西側は鈴鹿山脈、南東側には遠くに伊勢湾を望み、敷地外からも建物がよく見える好立地であった。

要望として利用率増加、コミュニケーションの促進、新しいシンボルとなることが望まれた。

従来、通勤ルートとなっていた計画地に斜めに貫く通路を建物内に組み込んだ。この通路が通退勤時に必ず経

由する軸線となる。平面計画では軸線に面するように各エリアを配置することで利用率増加に寄与している。2階部分は南西側及び北東側にテラスを設けて周辺環境に開いた建ち方とした。妻面側の気積の大きい開いたテラスとする為、屋根棟を東西方向とした。この屋根棟のラインが2階の軸線である。

1階、2階の軸線は交差し吹抜けを介して繋がっている。この軸線を起点に従業員が世代、部署を超え、クロスオーバーしていくことを願っている。

審査委員長講評

建物内に通勤動線を意図的に貫通させ、施設内に託児所、売店、フィットネス、ラウンジ、会議という各機能を配置し、従業員らが日常的に接近しやすくする事を意図した作品である。おおむね矩形の建物であるが通勤動線軸の1階ストリートと、鈴鹿山系を望む視線軸を強調した2階廊下とが

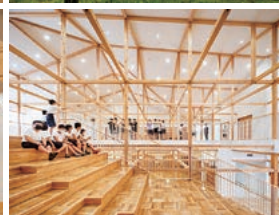
矩形内で鋭角に交わり、ストリート上部の2層の吹き抜けによって空間が立体的に展開している。大屋根は単純な切妻で、棟の頂部が斜めの視線軸に沿っているため、屋根・庇の勾配が均一であることから、軒高・庇下の高さが変化に富み、良い効果が生み出されている。

優秀賞

中津川市立福岡小学校

岐阜県中津川市

株式会社石本建築事務所名古屋オフィス



日吉祥太・三井笑奈 / 株式会社川澄・小林研二写真事務所

設計意図

本小学校は隣接する中学校と共に地域再編の一角を担う小中一体校である。自然豊かな風景に寄り添い、地域木材をふんだんに活用した建築を通して、地域に寄与し、記憶に残る「子どもたちの原風景となる学び舎」を目指した。校舎はこの地域で伐採・製材される一般流通材を活用するため、在来軸組工法を採用した。木材調達スキームの確立、さまざまな設計の工夫により、木材総使用量の96%を岐阜県材、そのうち65%に中津川市産材の活用を実現し地域経済にも貢献

している。1枚の大屋根は周辺の豊かな山並みの稜線と調和し、子どもたちの活動をやさしく包み込む。大屋根の下に広がる内部空間は象徴的な4対の丸太や、一般製材（120角材）による2,730mmモジュールで構成され、小さなスケールが連続する学びの空間が広がっている。柱を囲んだり、寄りかかったり、中津川の「木」に子どもたちが寄り添い、建築とともに成長し、記憶に残る空間になればと想いを込めた。

審査委員長講評

使われた木材のほぼ100%が地元産であり、120角の材を用いて、2,730×2,730モジュールで構成されている校舎であることにまず驚かされた。ヒューマンスケールの材木群で構成された空間で、子供たちが楽しげに過ごしている風景写真を見て、空間の優劣だけではなく、使い手にどの

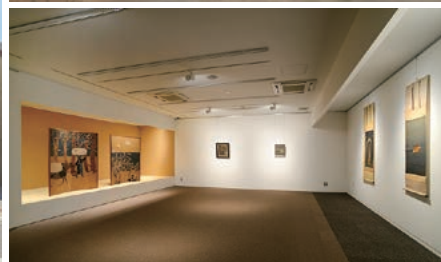
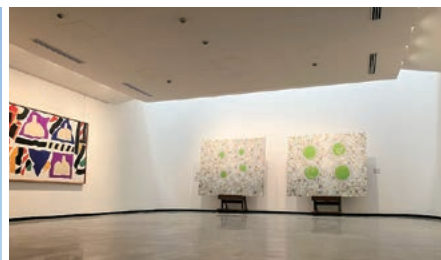
ようなインパクトを与えているかが大切であると再認識させられた作品である。幅広く続く大屋根を形成するための努力が応募書類に記載されているが、「うだつ」を敢えて立ち上げて、分節化されたファサード案の姿も見てみたかった。

優秀賞

碧南市藤井達吉現代美術館 増改築

愛知県碧南市

一級建築士事務所 株式会社日本設計中部支社



設計意図

当美術館は2008年に商工会議所から美術館へとコンバージョンされた施設で、運営・機能の拡張・強化を図るため更なる増改築を行った。既存を残しながら使い続けることで市民から愛着を持たれ成長しており、持続可能な社会での地方公共施設のあり方を示唆するものとする。

外装は、まち並み及び既存建物と調和した黒色の外壁をベースとしつつ更なる進化の象徴としてC打放しのポリウムを付加した。既存部、前回増築部を含む三要素は、機能に応じた表現とコンポジションの工夫に

より館の成長を表現した。

諸室計画は時間軸を意識することが重要と考え、改修部は「歴史の継承」、増築部は「次代への進化」をテーマとし、新設の多目的室はトップライトによる自然光豊かな空間とした。

今後の設備更新時の事業継続や更なる増改築の想定など、複数のライフサイクルを見据えた設計を行った。適切な管理、増改築計画を実践し、真の長寿命建物となることを期待する。

審査委員長講評

商工会議所を美術館に転用していた既存施設に、更なる増改築を加え、新たな水準の建築によみがえらせた事例。伝統的街並の復活に資する意図で、既存棟は従来のアイボリーから黒を基調とした外観に刷新された。増築部分はガラスカーテンウォールとコンクリート打ち放しブロックに分けて、内部機能の違いを明確に表現し、併せて増築と

既存改修部分とのデザインを違えて、何処を治しどこを付け加えたかが明示されている。後世に既存のストックを正しく伝えていくための手法の一つとして、明確な考え方を表明している。外部採光の導入や空調などの設備的な工夫も注目に値する。

奨励賞

中村区役所等複合庁舎

愛知県名古屋市

株式会社竹中工務店名古屋一級建築士事務所



設計意図

1964年に建築された区役所の老朽化に伴い、区の機能（区役所、土木事務所、保健センター、市税事務所）を旧本陣小学校跡地に集約した。小学校跡地で行われていた盆踊りやスポーツの継続利用を目的とした広場を囲むように庁舎施設と民間施設を配置し、半屋外の交流回廊「エンガワ」によって立体的に来庁者エリアを巡ることができる計画とすることで、庁舎に目的がある人だけでなく子供から高齢者まで日常的に利用したくなる居場所を生み出した。

多目的広場・交流拠点スペース・屋上庭園・集合会議室といった区民の日常の居場所が、災害時は地域の避難拠点施設へと変化する。「まちのエンガワ」は平常時・非常時問わず地域の安心・安全に貢献する区民の拠り所となる。

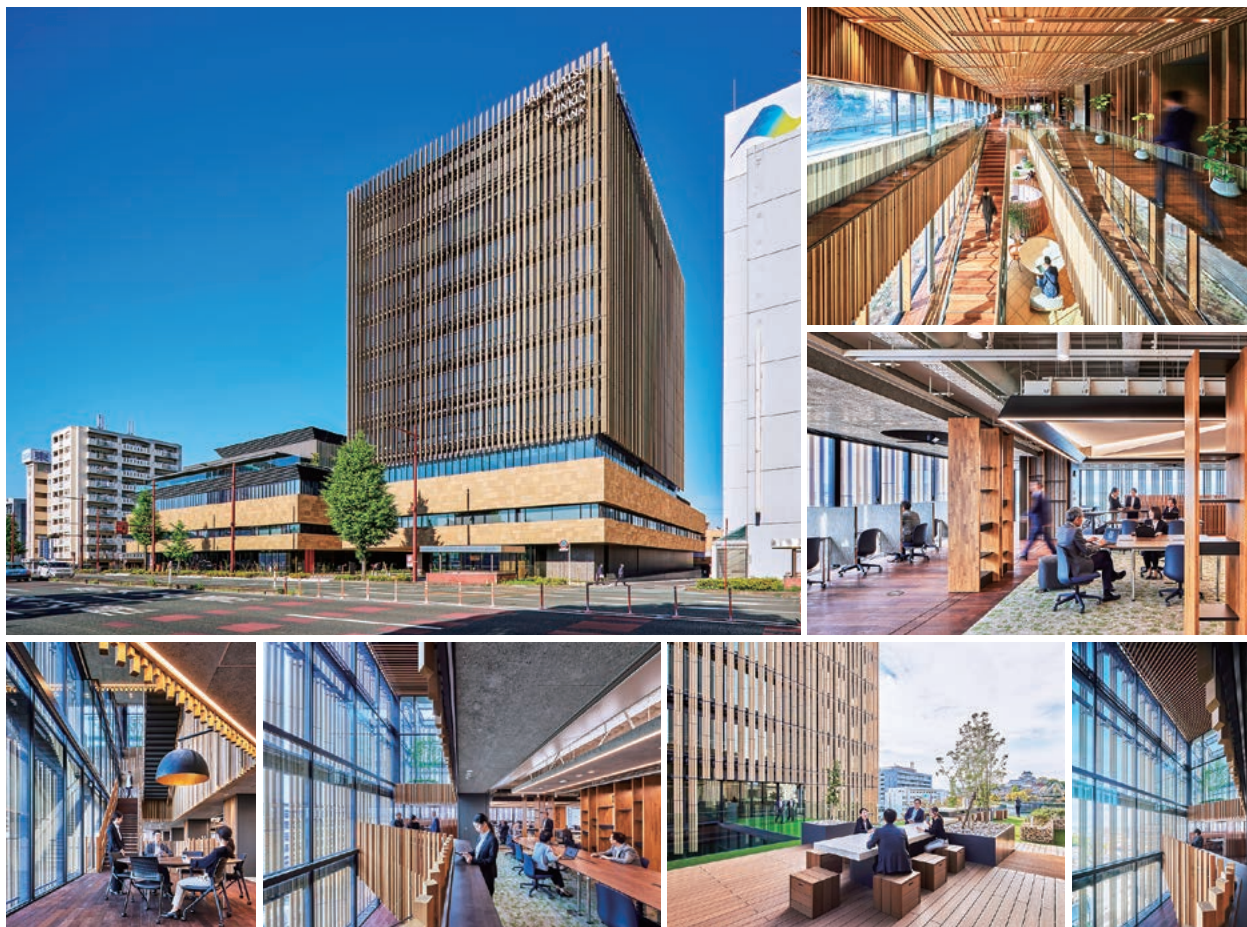
窓口・待合の天井部分は、起伏を持った曲面により県産材の木材が来庁者を包み込む。効率よく用を済ますための場所であるだけでなく、居ても良い場所として来庁者がくつろげるようにした。

奨励賞

浜松いわた信用金庫本部・本店

静岡県浜松市

株式会社日建設計一級建築士事務所



設計意図

組織の意思決定の迅速化とファミリー感の醸成を目的とする本部・本店の建替計画である。

外周柱をオフセットさせて「ペリメーター」を構造的に開放し、柱・梁のない透明感のある心地よい吹抜けで上下階をつなぎ、基礎躯体を減らしてコストとCO₂を削減した。内外の緩衝領域となるペリメーターは、「エンガワ」としてインテリアと環境を積極的に変化させ、ワークプレイスに選択肢を与えた。「部門長ファミリー」を中心に「部署ファミリー」を配置して移動

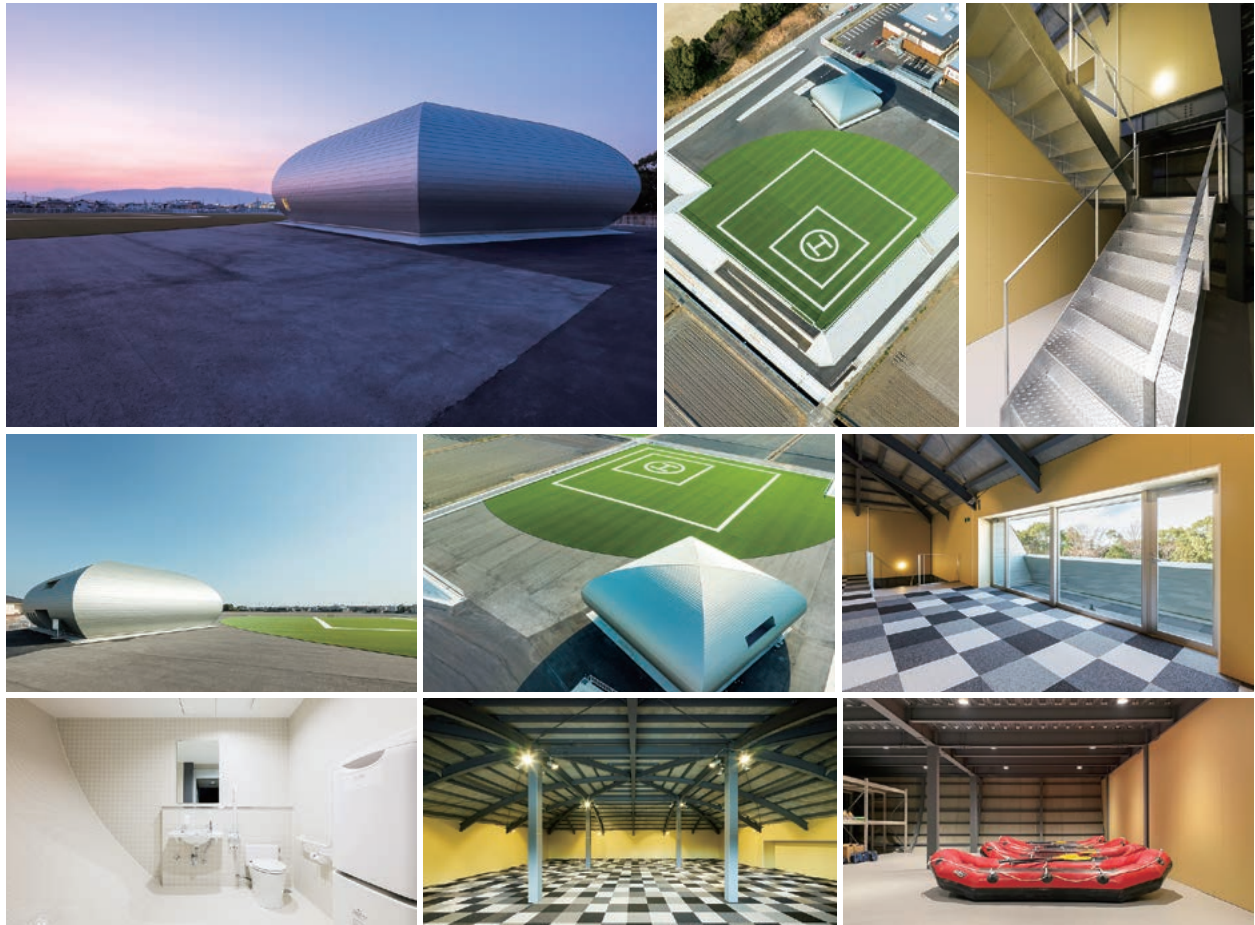
棚で仕切り、各ファミリーがまとまりつつもゆるやかにつながる「日本の伝統建築の間取り」のようなオフィスをつくった。グラデーションに角度が変化する外装ルーバーは、浜松城への眺望、日射・視線制御を両立させるとともに、適度に風をいなし、やわらかな風を室内に届けることに寄与している。構造や設備に無理をせず、環境の違いや不均一さを前向きに捉えて受け入れる、「自然体」のオフィスを目指した。

奨励賞

愛西市ゼロメートル地帯広域防災拠点防災倉庫

愛知県愛西市

五藤久佳デザインオフィス有限会社



設計意図

愛西市に建つ愛知県の防災倉庫である。この地域はゼロメートル地帯といわれ、1959年の伊勢湾台風の被害が最も大きかった。

この建物は3mの盛り土をした高台に建っており、災害時には被災者をヘリコプターで救助し、この建物に一時避難させる。救命ボートや災害用発電機なども備え、台風やヘリコプターの風に耐えつつ受け流す流線型をしている。地域のシンボルであり、ランドマークとなる

ため、かなり離れた位置からも認識出来る外観とした。災害時に活躍する建物ではあるが、平常時にこそ、この建物の存在が地域の人々に愛されることが重要である。地域住民がヘリポートのある高台に、いつでも自由に近づくことができ、散歩や広場として利用し、その存在を認識する事ができる。それは災害時に最大限活用される事に繋がる。